

これからの 国語科の授業のあり方

今回は、筑波大学附属小学校の青木伸生先生と東京学芸大学の中村和弘先生に、新学習指導要領を踏まえ、どんなことを大切にして国語科の授業を考えていけばいいか「読むこと」の領域での授業を中心に話し合っていました。



東京学芸大学 准教授 **中村 和弘** (なかむら かずひろ)

愛知県生まれ。東京学芸大学卒業後、川崎市内の公立小学校教諭、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭を経て、現職。専門は国語科教育学。中央教育審議会「国語ワーキンググループ」委員、「言語能力の向上に関する特別チーム」委員として学習指導要領の改訂に携わる。



筑波大学附属小学校 教諭 **青木 伸生** (あおきの のぶお)

千葉県生まれ。東京学芸大学卒業後、東京都の教員を経て、現職。全国国語授業研究会会長、教育出版国語教科書編著者、日本国語教育学会常任理事、國學院栃木短期大学非常勤講師。「青木伸生の国語授業 フレームリーディングで文学の授業づくり」(明治図書)ほか著書多数。

国語科の授業の 現状と課題

中村 新学習指導要領も移行期の2年目となり、取り組みが進んでいる学校が多くなってきたように感じます。

青木 「主体的・対話的で深い学び」を研究テーマにする学校が目立ちますね。

中村 熱心に取り組まれている点、逆に課題や改善が必要だと感じられる点を挙げていただけますか？

青木 大きく二つあると思います。

一つ目は「対話的な学び」に重点を置く学校が多いのですが、先生主導の活動になり、主体的・対話的のセットで捉えた学びになっていないこと。

二つ目は「深い学び」そのものが目的になってしまっていること。

三つ目は、国語科の授業としてのスタイルはあまり変わらないこと。読むことの授業では、場面ごと段落ごとに詳しく読んでいこうという傾向があり、「ごんぎつね」でいえば、ごんの気持ちをたくさん想像させて、いろいろな気持ちを豊かに発言させることが「深い学び」だ、という意識が根強い。

活動そのものが充実することが深い学びにつながるはずなのですが、

中村 活動と深い学びが両立できる

ような授業づくりが課題ですね。

新学習指導要領では、「読むこと」で、構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有という流れが示されました。

青木 今回示された読みのプロセスはとてもよかったですと思っています。いままでは、たとえば「ごんぎつね」を読んだときも、初発の感想を書かせた後、場面を限定して詳しく読むところにシフトしていくことが多かった。

ですが、そもそも全体が見えていないと、そこから何が課題なのか、どこを深く読みたいのか、といったものが見えてこないはず。そういう意味では、構造と内容の把握を打ち出したことは大事なことだと思っています。

中村 青木先生の「フレームリーディング」と通じるそうですね。フレームリーディングの「フレーム」とは、どういうことでしょうか。

青木 まず作品の全体像を捉えるようなフレーム(枠)をつくることです。

物語であれば、最初こうだった人物が最後こんなふうになるお話だよ、という大枠を捉えるわけです。悲しかったのが最後嬉しくなったお話だよ、喧嘩していたのが仲直りしたお話だよ、ということ、低学年から読み方として経験させていきます。



中村 系統的に積み上げるのですね。

青木 ごんに対する兵十、「海のいのち」ならば太一に対して与吉じいさがいるように、関わっている人物がいま

す。この人物が、中心となる人物を変

えるためにどうやって関わっていたのか、どんな出来事を通して変わっていったのか、といった文章を読むための目のつけ所、それ自体もフレームです。

作品全体を捉えるためのフレームもあるし、中心人物のフレーム、あるいはもつ別のフレームもあります。

たとえば、最初は暗い海の底とか、悲しい感じの色だったのが、だんだんカラフルになり最後は違う色に変わっている。色の変化に目をつけるというフレームを当てると「赤には赤の意味

がある」といった発見があるのです。**中村** なるほど。作品構造としてのフレームもあるし、作品を捉える視点となる方法論的なフレームもある、と。

青木 作品全体のフレームも観点の一つです。「ハッピーエンドだぞ」「くり返しのお話になっているぞ」といった作品構造としてのフレームもありま

す。子どもに系統的にいろいろなフレームを持たせようということです。**中村** 系統的にということは、低学年ではこのフレームを中心に、中学年では低学年で学んだフレームを生かして新しいフレームを、さらに高学年では別のフレームを、というように、学びが積み重なっていく。引き出しが増えていくイメージでしょうか。

青木 そうです。子どもにとつてはいろいろなフレームを持たたほうが、より多面的に読めるようになります。

たとえば、2年生の「きつねのおきゃくさま」では、はらぺこきつねが、ひよこに会い、あひるに会い、うさぎに会い、おかみに会い、うさぎに会い、というくり返しの中での変容というフレームがあります。

これが5年生で「大造じいさんとガン」と重なるわけです。

大造じいさんが残雪をいまいましいと思った。残雪を捕らえるために最初

はウナギ釣り針の作戦をしかけた。たかが鳥と思っていたのに、なかなか大した知恵を持っているな、とちよつと変わる。タニシをばらまいたり、おとりの作戦をやったり。そこにハヤブサが登場する。その過程を通して、大造じいさんは残雪に対する見方を変える。

「きつねのおきゃくさま」と「大造じいさんとガン」は、作品も違い、扱っ

た方も違うけれど、作品構造で重ねてみると同じくり返しの構造だとい

うのが見えてきます。くり返しというパターンを低学年で学んでおくと、高学年でまたつながるといふことです。

中村 青木先生はいつごろからフレームリーディングの授業をされているのでしょうか。

青木 2012年くらいからです。文章は細切れに読むな、まるごと読まないと読んだことにならない」というのは、東京都青年国語研究会（青国研）の創設者である倉澤栄吉先生がよく言っていたことです。全体を読ませるために、具体的にどのような発問をすればいいのか、どういう指示で投げかけると文章を通して読めるかということと意識して、そこからフレームリーディングの指導法が生まれたのです。

まるごと読んで内容の全体を捉え



その上で必要に応じて「それはなんだろう」「いつ変わったのだろう」と詳しく読むプロセスは、新しい学習指導要領の流れと合致しています。

中村 最初に全体を捉えて、いろいろなフレームで詳細に読むというのは、学習過程としても明解ですね。

青木 フレームリーディングが全てとは思いませんが、一つのやり方としては有効だなと考えています。

中村 現場の先生方のフレームリーディングへの反応はいかがですか？

青木 私が出かけていって授業するのは、飛び込みの1時間だけです。その1時間で作品の全体を見渡すような授業をすると、「1時間でここまで

読めるのか」という感想をいただきます。

中村 「きつねのおきやくさま」と「大造じいさんとガン」が同じフレームで読めるとおっしゃいましたが、どの作品はどのフレームで読むと効果的なのか、あるいは、子どもが読みたくなるフレームは何かなど、どうやって見つけているのですか？

青木 それは教材研究しかないですよ。「ごんぎつね」を例にすると、最初の一文は「これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。」から始まります。

茂平じいさんはごんが生きていた時代とは違う人で、昔話をしている。

最後の場面きたときに、ごんが撃たれ、残されたのは兵十だけ。すると、兵十が話さなければ、この話は誰も知らないはず。兵十が誰かに話したから、それが伝わったに違いない、兵十はいつ誰に話したのだろう。作品の中の登場人物を確かめると、ごん、兵十、加助がいて、いわし売り、弥助のおかみさん、と出てくる。すると当てはまりそうなのは加助しかいない。

加助と兵十のやり取りの場面は第四場面と、第五場面に出てきます。お念仏の行きと帰りのところ。そこを詳しく読むと、加助が兵十の仲良

しであることがわかってきます。

中村 そうかも、と思って丁寧読んでいくと見えてきますね。

青木 そうです。兵十から加助に話しているんですね。「おれはこの頃不思議なことがあるんだ」と。

中村 「何が？」と返しますよね。

青木 「うそと思うならあした見に来いよ」と言つて、お念仏に入つていく。そして、帰りのシーンになると、今度は加助から話しはじめますね。「さっきの話をずっと考えていたんだけれど」：ずっと考えていたつて加助は何分考えていたんだらう。

中村 お念仏の間ずっとだつたら、短い時間ではないですね。

青木 小一時間は考えているんです。村人の顔ぶれを見て、「こいつじゃないだろ」「こいつでもないだろ」「こいつがやるはずないよな」と、一人ひとり消去していく時間があるわけです。

中村 確かに！

青木 結局村人が誰も残らなかった。「まして俺でもない」と自分も外した加助の出した結論が「神様の仕業」だったのです。加助はいい加減に言っているわけじゃない、よくよく考えて誰も残らなかったから、神様の仕業としか結論の出しようがなかったんです。そこまで考えてあげられる加助

だから、次の日兵十の家に行ったのでしよう。

中村 「あした見に来いよ」と言われていますからね。

青木 第六場面で加助が登場するシーンは描かれていないから、ごんが撃たれた後に行っている。そうしたら、兵十は加助に言えるはず。それは、「お前が昨日神様といつていたのは、実はごんだつた。そのごんを撃つてしまった」と。

中村 なるほど。

青木 その村では、ごんはいたずらぎつねとして有名だから、加助は村人に話せるわけです。「あのごんが、実は兵十にこんなことをしていたんだよ」と。加助から村人に伝わり、村人から子どもに伝わり、代々伝わって、茂平じいさんまで来たんだ、とつながります。そういう伏線が全部がつながっているのを解き明かして読むと、物語ってすごいな、と子どもは思う。そういう物語の面白さを子どもに伝えられたら、いいなと思いますね。

中村 細切れで読んでみると、丁寧に読んでいようだけれど、深くは読んでいなかったということですね。

青木 伏線は横に流れているものなのに、場面ごとに縦に切ることで、つながっているはずの伏線がぶつ切りに

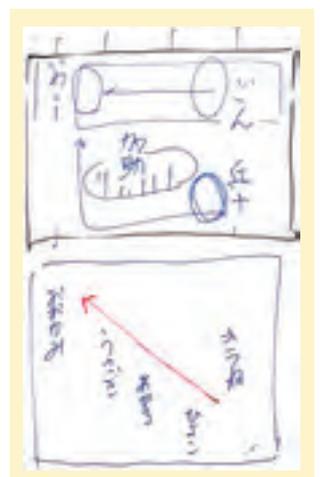
なつて、見えなくなつてしまふ。

第一場面、第二場面と順を追つて丁寧にやると、子どもが疲れてしまふから、第四場面、第五場面は音読で飛ばして、最後の場面をやるとういう先生方も多いんです。加助がこんなに大事ななのにもつたないですね。

国語でも「わかった！」の声を

中村 現場の先生方に向けて、具体的なアドバイスをいただけますか？

青木 まず、教材研究をもう一度見直しましょう、ということですね。教材研究をすればするほど先生には面白いことが見えてくるのだけれど、それをいかに子どもが自ら発見したかのよう授業をするかを心がけること。算数の授業を見ると、「先生、わかった！」とか「そうか！」といった反応があるけれど、国語ってなかなかさうい



う反応がない。なぜなら、書かれている内容を確認するだけの授業が多いからだと思うのです。読めばわかるでしょという授業では、「先生、わかった」とは言わない。書かれてはいるけれど、ここどこがつながる、という発見をすれば、「先生、見つけた」と言う。そういう授業ができれば、国語の授業が面白くなると思います。

中村 算数の「わかった」にもしかけがありますからね。

青木 国語には、わざわざこちらがわからなくても、文章中にちゃんとしかけが存在します。それを授業中に子どもたちが見つけられるようにすることで、授業はいくらでも変わると思っています。

中村 具体的にはどのような方法があるのでしょうか。

青木 そうですね。板書が大事ですね。全体が見渡せるような板書を意識してつくることが大切です。

たとえば「きつねのおきやくさま」も、ただ出てきた順番に並べるのではなくて、書きながら斜めに上がっていくということが目に入るだけで、最後のおおかみとの闘いの山場に向かう作品の構造が見えてくる。登場人物の並べ方だけでも、板書で見せられる。「先生、なんでそこ斜めに上がっている

の？」とか。「先生、見つけた!」「だから、こうなんだ」という発見がある。

中村 私の場合は「言葉」を大切にしたいので、どちらかというところの単語レベル、文レベルで状況を想像させようとしていました。一語一文へのこだわりというか…。

青木 全体を見ることも大事だけれど、単語にこだわることも大切ですね。たとえば、1年生、2年生の授業参観のときに「てるてるぼうず」という詩をよく使います。こんな詩です。

まずは音読をして、この詩のかたまりが「連」ということを教え、二つ目の連と二つ目の連で同じところを見つけて赤線を引こうと投げかけます。次に似ているけれど、ちよつと違うところに青線を引こうと指示します。

「てるてるぼうず」と「ふるふるぼうず」「ふるように」と「なるように」が見つかり、その後で「いくちゃん」と「あまがえるさん」が似てる、いや似ていないと議論になります。

「てるてるぼうず」と「ふるふるぼうず」は似ているけれど、「いくちゃん」と「あまがえるさん」は全然違うという声が上がります、でも他の子が「つくった人だから似ている仲間でないんじゃないの?」と言ってまた考える。

新しい学習指導要領に出てくる共

通と相違という観点で作品を見るわけです。

そして最後に「じゃあ、この詩の中の今日の天気は何?」と聞きます。

中村 今日の天気ですか?

青木 明日は天気になるように、ということは今日は天気ではない、明日もさんざかふるように、ということは今日は雨ふりだとわかる。「は」と「も」の違いでわかる。言葉って面白いよね、たった一文字で今日のお天気までわかっちゃう。授業参観でやると、親御

さんも楽しんでますよ。

中村 1年生でもわかるのですか?

青木 わかります。ちゃんと説明できますよ。最初に「今日の天気はなあに?」と聞くと、1年生は必ず窓の外を見ますが(笑)、「この詩の中のお天気だよ」と戻します。「晴れだと思おう人」「雨だと思おう人」と手を挙げさせると、パラパラつられて挙げる子もいるけれど、しばらく考えさせると、「そうか」と気づいてみんな納得します。

中村 なるほどね。

青木 たった一文字にこだわる言葉の面白さだし、こういうことに気づくことが言葉の見方・考え方を働かせることになる。

中村 いま同じことを思いました。言葉の見方・考え方を働かせるってそういうことですよ。理屈でいったらわからないけれど、こういう活動を通すとわかる。一文字を大切にすること、作品全体をフレームで見ることの両方が大切ですね。二つの連でできていると見るのも大きなフレームです。なるほど、面白いですね。下の学年だから一文ずつ読み、上の学年だからフレームで、ということではないんですね。
青木 低学年からフレームの読み方も必要だし、一字にこだわることも必要です。両方の積み上げが大切ですね。

